



Title	＜書評＞「街に出ていく」倫理学者：大庭健「自分であるとはどんなことか」（勁草書房）
Author(s)	中岡，成文
Citation	臨床哲学ニューズレター．1998，2，p. 115-116
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/81753
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

[Ⅶ 書評]

「街に出ていく」倫理学者
——大庭健『自分であるとはどんなことか』（勁草書房）

中岡成文

この頃は哲学・倫理学者もお高くとまっていなくて、身近なことについてもよく発言しているが、本書の著者大庭健さんの「街に出ていく」行き方はなかでも先駆的で、異彩を放っている。「日本でもっともアグレッシブなアル中寸前の倫理学者」というかれの自己規定はぜんぜん笑えない。アル中寸前のご愛敬としても、過激なまでにポップな言辞を振りまくこの倫理学の使徒は、ある種のトータルさの欠如に苛立つように、とても執拗に問い（問責）の連鎖を展開する。その追及が教育者的な配慮（と若干のペダントリー？）にも促されていて、おかげでたくさんの勉強をさせてもらえることは、問責に立ち会う者のしんどさをあまり軽減してくれない。

本書の学問的スタンスは主として分析哲学系の「心の哲学」とルーマンのシステム論とに置かれている。ただし、いったん大庭さんの鉄の胃袋で消化されてしまうと、思想たちはそれなりにわかりやすくこなれ、相関図も明確になるが、それぞれの思想のオリジナルなたたずまいとは違ってしまいうケースもある。ルーマンのシステム論はその重大なひとつだと私は思う。

意味というものは個人の主観的な意図などに回収されず、私たちの相互行為のプロセスにおいてのみ事後的かつ公共的に確定しうるものとなる。このことを大庭さんはルーマンの独特なコミュニケーション概念にも言及しつつ（79）力説し、これを「行為の共軌的实现」と呼ぶ。大まかな方向としてはうなずける。ただ根本的な問題は、そのような狭い意味での相互行為（社会的行為）の領域に大庭さんが意味一般を囲い込もうとしていることだ。自然の出来事には行為をもって「有意味」に接続することはできないとかれは断言する。しかし、ルーマンはそんなことは言わない。雨が降ってくれば傘をさす。これは「因果関係」（86）ではなく、有意味な接続である。なぜなら、雨に打たれたまま歩くという選択もできるのだから。ルーマンのいうコミュニケーションは大庭さんのいう行為より明らかに広い概念である。そしてこれはルーマン解釈の当否を超える。

あなたと私との「呼应可能性」を「手軽に値切って」無私を語る形而上学者（177）に大庭さんが憤ってみせる、その意図は支持したい。行為の連接から独立とされる個人の「存在」を重視することに批判的（87）なもの、「ほんとう」の自分探しが無限後退に陥っていくことに痛ましさを感じる（14）のも、理解できる。しかし、私を「ココ」に還元することによって、発達心理学的に出現した「一人称を用いて当のシステムじしんを指示」する心システム以外に特別な自己はいないと断言する（165）ことによって、私の自己関係（自己コミュニケーションと呼びたい）の複雑さと豊かさは切り縮められてしまうのではないか。本書がめざすように若い人たちの「所在なさ」の感覚に切り込むためには、ステレオタイプを強制する日本の社会状況を指弾するだけで足りるのだろうか。

「自分である」ことについてこんなにダイナミックな本を書く大庭さんのうちには、きっとたくさんの「私」がうごめいているだろうに、最後はきっちり倫理的還元主義者の顔をしている。倫理学者になりきれない私としては、その秘密をぜひ知りたい。

（『週刊読書人』第2225号、1998年3月5日）